

1面から続く

厳しい環境下でも自前の技術を生かして新分野に挑戦する。そんな頼もしい中小企業は道内にもある。

従業員30人の農業機械メーカー「エフ・イー」(旭川)。野菜の洗浄機や皮むき機などを独自に開発して苦境を乗り切り、業界に地歩を築いている。

1959年の設立当初は、佐々木通彦社長(61)の父・通さん(故人)が木材加工用機械をつくっていた。安い外国材の輸入増により国内の木材加工業が衰退したあおりで、80年代初めに倒産しかける。札幌の農機メーカーに勤めていた通彦さんが入社したのが83年。それからは鉄工技術を生かして農機メーカーへと転換し、業績を回復させた。飛躍の原動力となったのが、付加価値の高い「葉がついたままの大根」を洗える機械だ。回転ブラシの工夫で葉まで傷つけずに洗えるのが特徴で、2002年に売り出したところ、全国

# 大根洗浄機で大飛躍

## にっぽん白書

自社開発した野菜洗浄機を前に将来戦略を語るエフ・イーの佐々木通彦社長

の農家から引っぱりだこになった。その後も野菜をサイズや形状別に仕分けできるセンサー付き選別機などを次々と世に送り出し、食品加工メーカーからも注文が相次ぐ。

◇ 華やかな大企業の陰に隠れがちだが、日本経済を支えているのは中小・零細企業だ。「きねや足袋」や「エフ・イー」のような元気企業もあれば、浮揚のきっかけをつかめず苦しむ会社もある。中小・零細企業の「いま」を報告する。

（東京報道の河相宏史が担当し、3回連載します）

小企業論)は「厳しい環境を生き抜いた日本の中小企業は、欧米でも一番になれる力を秘めている。海外や新分野への進出を恐れぬ姿勢が重要だ」と強調する。

佐々木社長の入社時にゼロになっていった年商は、今や8億円に増えた。「中小企業は社員に夢を持ってもらうことが大切」と佐々木社長。次の目標である東南アジアへの輸出に向け、着々と準備を進めている。

小さな会社にも大きな可能性がある。福山大学(広島県)の中沢孝夫教授(中



中小企業はいま ①